

## 【日本の大学】第71回——帯広畜産大学：畜産・獣医学中心に知の創造と実践

帯広畜産大学は、北海道の中東部に広がる十勝平野の中心、帯広市にある畜産科学、獣医学を中心とした教育研究を推進する日本で唯一の国立大学である。

基本目標としては「日本の食料基地」として食料の生産から消費まで一貫した環境がそろった北海道十勝地域において、生命、食料、環境をテーマに「農学」「畜産科学」「獣医学」に関する教育研究を推進し、知の創造と実践によって実学の学風を発展させ、「食を支え、くらしを守る人材の育成を通じて地域及び国際社会に貢献する」としている。



キャンパス全体図

### 地元有力者が誘致、土地を提供

以下、大学のホームページなどから帯広畜産大学の歴史と現況をみてみよう。

大学の前身は帯広高等獣医学校であり、1941年に設立された。帯広の有力者たちは、地元で高等農林学校を誘致しようと多くの努力を重ねてきた。戦時体制となったため、軍馬獣医師を養成する高等獣医学校の創設へと転換、当時の1町村の年間予算の4倍近い額の寄付金を集め、学校用地を確保したという。土地は、1900年ごろに売買地区総代人の中村善右衛門氏が開墾したもので、氏は190haに及ぶ広大な原野を開墾し、公有地として当時の川西村に提供した。その土地は村有牧場として活用された後、北海道庁立十勝農業学校（現・

帯広農業高等学校)の移転、帯広高等獣医学校の誘致、帯広畜産大学設立へ引き継がれている。

帯広高等獣医学校はその後、帯広獣医専門学校、帯広農業専門学校と改称された後、1949年5月31日に新制の帯広畜産大学として誕生した。学科としては獣医学科、酪農学科の2学科であった。附属農場、附属図書館も同時に設置された。

1960年には、地域農業の中核的リーダーを養成することを目的に別科(草地畜産専修、現在の酪農専修)を設置したほか、1967年には獣医・農畜産分野における高度専門職業人養成を目的に、大学院畜産学研究科修士課程(獣医学専攻・酪農学専攻・農産化学専攻)を設けた。その後、修士課程には農業工学専攻・草地学専攻や、畜産経営学専攻、畜産環境学専攻などが加わっている。

1990年には大学の学科を、従来の家畜生産科学科、農産化学科、農業工学科、草地学科、畜産経営学科、畜産環境学科の6学科から、畜産管理学科、畜産環境科学科、生物資源化学科の3学科に改組した。

大学院では、2004年に「食の安全確保に関わる人材育成」を目的に、修士課程に独立専攻として畜産衛生学専攻を設け、06年には、畜産衛生学の博士の学位を授与する大学院博士課程が設置されている。

大学は、畜産学部1学部であるが、「アドバンス制教育課程」と「ユニット制」を採用している。アドバンス制とは、下級学年では大学で学ぶための基礎となる幅広い知識や技術、農畜産全般の基礎知識を中心として学習を行う。上級学年に進むにつれて獣医・農畜産の特定の分野の深い専門知識・技術の学習へと前進(アドバンス)していく過程を指す。アドバンス制は、基盤教育、共通教育、展開教育の三つの教育分野からなっている。

ユニット制は現在、七つのユニットで構成されている。獣医学、家畜生産科学、環境生態学、食品科学、農業経済学、農業環境工学、植物生産科学の各ユニットである。



総合研究棟 1 号館

## 北大と共同獣医学課程

獣医学ユニット（6年制）では、動物の疾病の診断と予防技術に実践的に対応する臨床獣医学分野及び人獣共通感染症をはじめとした公衆衛生学分野に貢献できる獣医師の養成を目的としている。北海道大学獣医学部との「共同獣医学課程」として、両大学がそれぞれ持つ優れた教育資源を結集し、ひとつのカリキュラムで教育を実施している。ITを用いた双方向遠隔授業も行っている。基礎生命科学を中心とした基礎獣医学教育、野生生物学、国際基準の実践教育も充実しており、国際化が進む社会に貢献できる獣医師養成を目指している。この過程では、北大のほか、山口大学、鹿児島大学とも連携して臨床実習の充実などの教育カリキュラムの改善にも取り組んでいる。



#### 獣医学ユニット

家畜生産科学ユニットは、ウシやウマなど家畜の飼養管理、繁殖や改良、乳肉の生産・利用について、分子から生体までの知識を習得するとともに、実習を通じて実践的技術を学ぶことで生命科学分野から畜産現場まで幅広く活躍できる人材を養成する。



馬介在活動室の馬たち

環境生態学ユニットは、多様な植物群（哺乳類、鳥類、昆虫、植物、微生物など）を含む生態系の仕組みを学び、農畜産環境とそれを取り巻く自然環境の関係を理解し、環境の保全と管理を考えながら、持続可能な農畜産業とこれからの生命科学分野で活躍する人材を育成する。

食品科学ユニットでは、食品の一次機能（栄養成分とエネルギー）についての教育を基礎に、食品の二次機能（おいしさや食感）を学ぶ加工・利用学分野、三次機能（生体調節や健康）を学ぶ機能科学分野を総合的に理解し、農畜産物を素材として食品製造から研究・開発までを担う人材を育成する。

農業経済学ユニットは、農畜産物の生産から加工・流通・消費に至る過程を、経済学を中心とする社会科学的なものの見方や知識から、総合的に把握し、地域や世界の農業・フードシステムが抱える課題に対応できる人材を育てる。

農業環境工学ユニットでは、農業農村工学や農業システム工学を主とする理論に基づき、先端的農業と環境保全を両立させるために必要な技術体系を学び、農業の基盤づくりや高度な農業機械分野で活躍できる人材育成を図る。

植物生産科学ユニットでは、日本の食料基地である北海道・十勝の立地条件を活かして作物生産を支える土壌と病害虫を含めた栽培環境から、その環境で育つ作物の生理、生態、育種までを総合的に理解できる専門職業人を育てる。

大学院は 2006 年にできた独立専攻の畜産衛生学学位プログラムだけだった博士課程を、2018 年などの改革で、獣医・農畜産の全分野で学部から博士課程までの一貫体制を構築した。さらに獣医・農畜産を融合する研究推進を図るため、動物医科学コースを新設して、獣医師養成課程以外を卒業した学生を対象に、農畜産の専門知識と獣医学の基礎知識を合わせ持ったマスターを養成している。

大学では畜産学部の別科として 2 年間の酪農専修を設けている。畜産・酪農を中心とする畜産科学の基礎及び実践的教育である。カリキュラムは基礎学術科目と専門教育科目から構成されている。短期大学ではないが、短期大学に勝るとも劣らない専門性と教育内容の充実を誇っている。国内有数の農業地帯である十勝地方に位置する利点を活かして、農家や農業関連施設などを見学する機会にも恵まれている。



畜産フィールド科学センターの牛たち

### 3 大学で北海道国立大学機構に

大学は2022年4月、小樽商科大学、北見工業大学と3校で、経営統合を実現し、国立大学法人北海道国立大学機構となった。機構は、農学、商学、工学を担う国立大学の結束と産学官金の強力な連携によって、北海道経済・産業の発展と国際社会の繁栄並びに、SDGsに示された持続可能な社会の実現に貢献するために、北海道内の国立大学の教育研究機能を強化し、国民の要請に応えるとともに、日本の高等教育及び学術研究の水準向上を図ることを目標にしている。



冬の大学の白樺並木

学生数は学部が1164名（うち女性702名、外国人留学生9名）、大学院（博士課程）が173名（うち女性、91名、留学生48名）、別科が20名（うち女性5名）である。教員数は133名である。（以上2021年5月現在）、

学長は長澤秀行氏である。帯広畜産大学畜産学部獣医学科卒業、同大学院畜産学研究科修士課程修了、徳島大学大学院医学研究科博士課程修了、医学博士。1995年に帯広畜産大学原虫病研究センター教授、2002年同大学副学長、08年より学長に就任。2016年から名誉教

授。2022年4月に設立された北海道国立大学機構大学総括理事に就任するとともに学長に再任された。

文：滝川 進

写真：帯広畜産大学